

# 発 明 文 化 論

〈第 55 回〉

丸山 亮

## デザインの交流

久しぶりに東京駅の丸の内口に出たら、あたりの景観がずいぶん落ち着いたものになっていてびっくりした。東京駅のビルは、一時、建て替えの議論もあったが、戦災による破損部分を復元して竣工時の姿に戻りつつある。レンガ建ての美しい建物で、日本の表玄関にふさわしいとしみじみ思う。辰野金吾が手掛けた、西洋近代建築を範とする代表的な建物だ。

それを正面に見て広場の右端には、これも解体か保存かで議論が沸騰した東京中央郵便局が、正面部分の躯体を保存しながら後方に新たな高層ビルを立ち上げている。古い庁舎はモダニズム建築の代表例とされ、一見そっけないが、重厚な東京駅とはコントラストをなし、これにも十分な存在意義がある。

そして郵便局の右奥には、レンガ建ての旧三菱一号館が復元され、新しい美術館に生まれ変わっている。ここで KATAGAMI Style というデザイン展が開かれたのをのぞいてみた。江戸小紋などの微細な意匠が、ヨーロッパにわたり、新しい展開をする道筋を示すきわめて興味深い展示で、知的興奮を誘う。

中心になっているのは、その江戸小紋を染めるのに使われた防染用の型紙だ。柿渋で補強した和紙に無数の細かく連続する文様をくり抜いて、型をつくる。それを布に当て、上から染料を入れていくと、くり抜いた部分だけが染め上げられる。こうした布は小袖や羽織などに使用されたが、明治以降の服装の変化で次第にすたれていった。けれども文様と道具としての型紙に注目した西欧人によって型紙の方は熱心に買い集められ、この地にもたらされた。早くはシーボルトによるコレクションもあったが、欧米のコレクションを飾るのは明治期になって集められたものが多い。

19 世紀の後半、ヨーロッパは日本から渡来した浮世絵などがジャポニスムと呼ばれるほどのブームを起こし、印象派の画家たちに大きな影響を与えたことはよく知られている。だが、型紙の果たした役割は、これまでほとんど知られていなかった。

微細な文様のモチーフとなっているのは銀杏や松葉、花などの植物、魚、鳥、虫などの動物、点や斜線を組み合わせた抽象文様と様々で、その連続が快いリズムを生む。中には青海波など大陸から渡来した意匠もなくはない。細かい文様の連なりをいささかの乱れもなく実現する職人技は見事で、その根気を想像しただけで気が遠くなりそうだ。この文様によって染め上げられた布を衣裳に仕立てたとき、まず口をつけて出てくる印象は、粋ということになろう。展示品として並ぶ袴や小袖、浴衣のどれも、一様にこの粋な感じを与える。

欧米に渡ったこれらの型紙は、日本美術の愛好家に所有されたほか、当地のデザインを生むのにも貢献している。生活の中の工芸美を追求するアーツ・アンド・クラフツやアール・ヌーヴォーといった新潮流の運動、各地の万国博覧会、美術工芸学校などが、デザインの移植に力を貸した。ウィーンでは工芸学校の教育に、隣接する博物館の型紙コレクションが参照されている。型紙は本来の布地の染織デザインを決めるとき参考にされただけでなく、食器や家具、建築へと応用が広がっていった。縄で編んだ椅子のデザインや、花器のガラス工芸、壁紙から、さらにビル正面の装飾にまで及んだことが、展示から確認できる。もっともただの引き写しではなく、そこに創意が働いていることも明らかだ。

丸の内に三菱の洋館が立てられ、辰野金吾が東京駅を設計していたころ、ヨーロッパでは、日本発のデザインがさまざまに形を変えながらこの地に根を下ろしていた。デザインが世界規模で交流する潮流が浮かび上がってくる。

(まるやま りょう 共生国際特許事務弁理士)